

(オンライン読本) お金を育てるレッスン 1

## インフレと天気予報 その1

### ●流動性のお金 と 収益性のお金

資産運用のことを考える前に、まずはお金の種類をふたつに分けてみましょう。

例えば、今年の家族旅行費や、2年後のお子さんの学校入学金を、普通預金やMMFに預けておくのは自然なことです。

しかし、来年の車の購入費や、3年後の住宅購入の頭金を、株式ファンドを用いて運用するのはどうでしょうか？

これは単純に危険なことです。

なぜなら、「お金の種類と、利用すべき金融商品が一致していない」からです。

**流動性のお金** とは、日々の生活を支えるお金であり、おおむね向こう5年以内に支出予定のあるお金です。リスクが低く、現金化するのに困難でない金融商品を選ぶべきです。

例 **預貯金、MMF** など。

一方、**収益性のお金** は、長い期間置いておけるお金です。(最低5年。おおむね10年以上)

つまり、「育てるのに適したお金」といえます。

では、「収益性のお金」は、どんな金融商品を用いて育てるべきなのでしょう？

まず、

**長期の物価上昇率 (インフレ率) に負けない商品** であることが求められます。

例えば、10万円の「収益性のお金」を **タンス預金** して、20年間置いておけばどうなるでしょう。

今現在、10万円で買えるものが、20年後には買えなくなってしまう。

なぜなら、モノやサービスの値段というものは、長い目で見れば上昇しているからです。(これを **インフレーション** といいます)

つまり、タンス預金に頼って「お金を育てる」仕事を怠ると、長い目で見れば、皆さんのお金が「**モノを買う力**」(購買力) が低下してしまうということです。

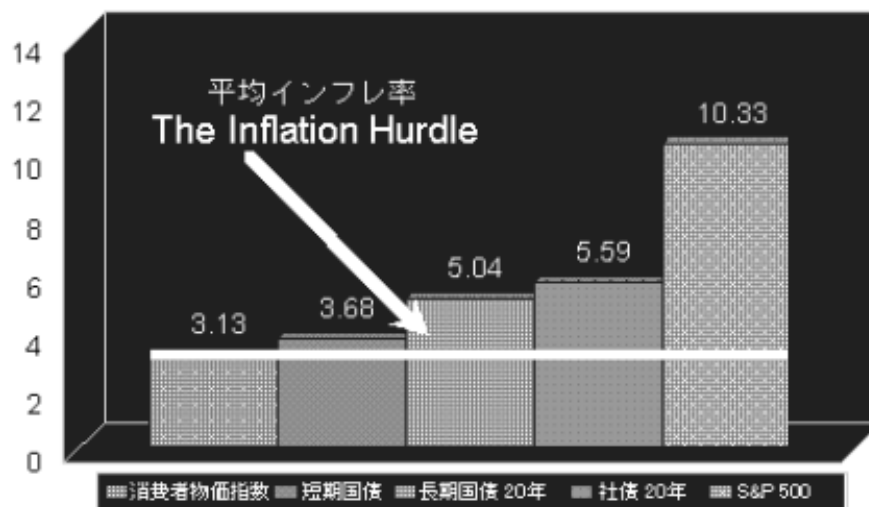
つまり、皆さんが預けたお金が成長せずに、  
「**実質価値としては目減りしてしまう**」 ということなのです。  
(このように) 長期にわたる物価上昇によって、資産の実質価値が目減りしてしまうリスクを **インフレリスク** といいます。

このインフレリスクは目に見えにくいものです。  
しかし、皆さんの資産を確実に侵食します。

20年後の地点から見れば、皆さんのお金が物価上昇率と同じくらい成長してこそ、**ほんとうの意味での「元本保証」** といえるのです。

### ●インフレというハードル

下のグラフは、1926年から1993年までの、アメリカにおける各金融商品の **平均収益率** を示しています。



S & P 5 0 0      ニューヨーク証券取引所等に上場するアメリカの優良企業500社の株価指数

グラフを見ると、

「**長期的にインフレ率を上回って成長している金融商品は、株式である**」  
ことがわかります。

長期国債の平均収益率ですら、インフレ率を2%弱上回っているに過ぎません。

「**インフレ率のハードルは意外と高い**」ということがおわかりいただけると思います。

なお、アメリカの例を挙げたのは、戦後の日本のマーケットでは、株式の平均収益率が15%を超えているからです。これは、今後の日本の潜在成長率を考えると、適当なサンプルとはいえません。

先ほどの 流動性のお金 収益性のお金 ということでは、

預貯金は、向こう5年間くらいに必要なお金を預けておくところ。そして、株式は、10年、15年と置いておけるお金を育てるところ。

という「使い分け」が必要になってきます。

またわたしは、

「**債券による運用だけで、お金を育てることはできない**」と考えます。

例えば、額面金額10万円の20年物国債を購入するとしましょう。皆さんは半年ごとに利息を受け取り、20年後には元本の10万円が戻ってきます。

しかしその元本は、20年前に投資した10万円であり、今現在、その10万円の「モノを買う力」（購買力）は低下してしまっています。

（インフレリスク、ですね）

また、債券から期待できる収益は（残念ながら）「右肩上がり」にはなりません。

**金利** というものは（長い目で見ると）上がったたり、下がったりを繰り返すだけだからです。

## ● リスクを感じることに

人間は本来、リスク回避的な生き物です。 わたしもリスクは嫌いです。 しかし、先ほどの「インフレリスク」でも触れましたが、

実は、リスクがない金融商品はありません。

違う種類のリスクを持つ金融商品が存在するだけです。

よくよく 考えてみれば、

私たちは明日の天気さえ、正確に予測することはできません。

人生も、正直言って不確実なことの連続です。 そのような中で大切なのは、

見えにくいリスクを感じ、見えやすいリスクを極端に恐れないこと。

つまり、「リスクとうまくつき合っていく」ことではないでしょうか。